

大正期の「山陰オリンピック大会」に関する一考察 ～地域におけるスポーツ振興の事例～

藤坂由美子*, 山田理恵*, 国重 徹*

A study of San-in Olympic Games in the Taisho period: A case of sports promotion in a local community

Yumiko FUJISAKA*, Rie YAMADA*, Toru KUNISHIGE*

Abstract

San-in Olympic Games originate in the First Track and Field Meet in the San-in District held in October of 1913 and hosted by Matsue City young men's association. When the fourth meet was held in 1916, the name was changed to San-in Olympic Games. In 1928, the name was again changed to All San-in Track and Field Championship and it has been used since then. The sports event has been held since 1913 and the 99th meet was held in 2016.

Newspaper companies in Matsue and Osaka publicized the San-in Olympic Games and helped organize and manage them, boosting enthusiasm for track and field in the San-in region in the Taisho period. A lot of people took part in the Games not only from Shimane and Tottori prefectures in San-in District but also from Chugoku and Kansai Districts such as Hyogo and Kyoto prefectures. It can be said that mass media had an impact on sports promotion.

Also, as a local sporting event with "Olympic" in its name, the Games had a historical significance in sports promotion in San-in District in the Taisho period. San-in Olympic Games boosted the local people's enthusiasm for sports. This sporting event produced excellent track and field athletes. The winners of the games could get an opportunity to take part in national track and field competitions and the Olympic Games. The supporters and the spectators gave enthusiastic encouragement to the participants and hoped that they would be successful. A sporting event like this which has "Olympic" in its name made people feel an intimate connection with the Olympic Games. It also served as a driving force for instilling the local people with sports to play, to spectate, and to support.

The International Olympic Committee considered the use of "Olympic" for a local sporting event such as the example of San-in Olympic Games to be an abuse of the name. That is why the use of the name ended in the Showa period. However, we conclude that this naming served to create the atmosphere of a festival in which the local people can take part and attract them to sports.

Keywords: Matsue City young men's association, San-in Olympic Games, sports event, the history of track and field

要約

「山陰オリンピック大会」は、島根県の松江市連合青年会によって1913年10月に開催された「第1回陸上大運動会」を始まりとする。1916年の第4回大会から「山陰オリンピック大会」と名称が変わり、1928年には「全山陰陸上競技選手権大会」へと再度名称変更をし、現在でも「全山陰陸上競技大会」として継承され、2016年で99回目に達している。

この「山陰オリンピック大会」は、松江や大阪の新聞社が大会運営の支援と広報を行い、大正期の山陰

* スポーツ人文・応用社会科学系

の陸上競技を盛り上げた大会であった。山陰地方の島根・鳥取両県をはじめ、中国地方や関西（兵庫県・京都府）からも選手が多数参加した。マスメディアがスポーツ振興に大きな影響を与えたといえる。

またこの大会は、「オリンピック」という名称が付けられた地域のスポーツイベントとして、大正期の山陰地域におけるスポーツ振興のうえで歴史的意味のある大会であった。「山陰オリンピック大会」は地域の民衆のスポーツ熱を高めた。この大会から優秀な陸上競技選手が誕生した。山陰オリンピックで優勝した選手には、全国規模の陸上競技大会や国際オリンピック大会への道が開けた。応援団や観衆は選手に熱い声援を送り、選手の活躍を期待した。このように「オリンピック」という名称が付いたスポーツイベントは、国際的な「オリンピック」を身近に感じさせ、地域に「する・みる・支える」スポーツが浸透していく原動力となった。

この山陰の事例のように、地域のスポーツイベントに使用された「オリンピック」という名称は、IOC (International Olympic Committee) によって濫用であると認識され、日本では昭和期に入って消滅してしまうが、この名称が民衆参加型の「お祭り」ムードを生み出し、地域の人たちをスポーツに取り込む一つの機能を果たしたといえることができるだろう。

キーワード：松江市連合青年会，山陰オリンピック大会，スポーツイベント，陸上競技史

はじめに

1913（大正2）年10月、島根県の松江市連合青年会によって、第1回陸上大運動会が開催された。同運動会は、3年後の第4回大会から「山陰オリンピック大会」^{注1)}と改称され、1928（昭和3）年には「全山陰陸上競技選手権大会」と再度の名称変更を経て（表1）、現在でも「全山陰陸上競技大会」として継承され、2016年には第99回に達した。

この「山陰オリンピック大会」は、大正期の山陰地域のスポーツ界、特に陸上競技界を牽引した競技会であった。青年団が中心となって陸上競技ブームを巻き起こし、地域のスポーツイベントとして全国からも注目された競技会の一つである。しかしながら、従来の体育・スポーツ史研究において、またオリンピック史研究において、大正期にこのようなイベントが複数の地域で開催されていたということが注目されたことはなかった。

大正期の地方青年団による競技会の研究としては、石川県青年体育大会に焦点を当て、その歴史的意味を青年団組織の再編と青年層への国民体育奨励という国家政策の展開過程から明らかにした佐々木（2006）の研究がある。佐々木によると、石川県においては、県教育会が青年体育大会

を主催する一方で、陸軍第九師団による軍事訓練的色彩の強い大会が運営されたという特徴が見られた。また、これまでの体育・スポーツ史研究では、大正期の青少年に対するスポーツ奨励に関しては、日本の総力戦体制の構築を念頭においた教育に対する軍事的・軍国主義的要求からの、青年組織の再編と青少年の体力・精神力の養成という文脈で語られてきた（高津，1994）。

「オリンピック」を大会名に付した国内の競技会は、大正期から昭和初期にかけて他の地域でも見られた。1915年に大阪豊中グラウンドで開催された「日本オリンピック」をはじめとし^{注2)}、上述の「石川県青年体育大会」も1919年の第2回大会は「石川県青年団第2回オリンピック・ゲーム」と称されたようである（大久保，1998）。また、中国地方でも1922年5月に「中国オリンピック」と称した中国6県による競技会が開催されていた（大阪朝日新聞，1922a）。しかしながら、各地で「オリンピック」と称するスポーツイベントが開催された経緯や、大会運営の全容についてはこれまで十分に検討されていない。一方で、「オリンピック」という名称が国内の競技会から消滅した背景に関する研究には、來田（2001）および和田（2013）の研究があるが、それらは国際オリ

ンピック委員会 (International Olympic Committee, 以下 IOC と略す) におけるオリンピック名称問題を追究したもので, 「オリンピック」という名称の地域のイベントについては述べていない。

そこで, 本研究は「オリンピック」を大会名に付し, 長く継続されたスポーツイベントの開催事例として「山陰オリンピック大会」に着目し, 地域のスポーツ振興の実態とその意義を考察することを目的とした。現存している「大阪朝日新聞(山陰版)」「山陰新聞」および, 島根陸上競技協会編『島根陸上競技史』(1957) の記述を主な史料として, 「山陰オリンピック大会」の実態とその変遷を明らかにする。「オリンピック」が山陰のスポーツ界に与えた影響を考察しつつ, 大正期のスポーツ振興の過程を地方の視点から再検討することは, スポーツのもつ機能を歴史的に検証するうえで意義のあることといえる。

1. 松江市連合青年会の発足と大運動会の開催

(1) 松江市連合青年会の発足

日露戦争後から大正期にかけて, 農村の経済的・社会的危機を背景に, 内務省および文部省に

より国内の青年集団の組織化と指導改善が目指され, 全国各地で青年団組織が編成され, 官製化が進んだ(熊谷, 1989; 国立教育研究所, 1974)。

松江市では, 1913年に文部省が県に対して, 県の青年団活動の状況調査を依頼したことを受け, 県がさらに市に調査・問い合わせを行い, 当時の松江市長高橋義比氏が市内各町内青年会の幹部を招集し, その活動状況を聴取した(島根陸上競技協会編, 1957, p.7)。この時集まった青年会は城北会, 末次博進会, 東茶町同志会, 苧町公義会, 片原町会, 末次誠美会, 白濁立志会, 魚町立志会, 天神町自在会, 津田街道忠正団などであった。しかし, それまでこれといった活動もしていなかったため, その場は一時散会し, 各町内へ帰って相談をした結果, 各町内青年会を一丸とした連合青年会を結成しようということになり, 同年, 「松江市連合青年会」という連合体が発足した(島根陸上競技協会編, 1957, p.7)。

(2) 大運動会の開催

松江市連合青年会には運動部が設けられ, 記念すべき第1回行事として1913年10月31日の天

表1. 「山陰オリンピック」開催年表 (1913-1929年)

回	開催年月日	大会名称	主催	会場
第1回	1913.10.31 (雨のため17種目目から3日後に延期)	松江市連合青年陸上大運動会	松江市連合青年会	天神裏(灘町)埋立地
第2回	1914.11.7	松江市連合青年陸上大運動会	松江市連合青年会	城山二の丸 (県立商業学校運動場)
第3回	1915.4.25	松江市連合青年陸上大運動会	松江市連合青年会	二の丸練兵場
第4回	1916.5.8	第1回山陰オリンピック大会	松江市連合青年会	松江市末次埋立地
第5回	1917.5.19-20	第2回山陰オリンピック大会	松江市連合青年会	松江市末次埋立地
第6回	1918.5.18-19	第6回山陰オリンピック大会	松江市連合青年会	松江市末次埋立地 (末次公園地グラウンド)
第7回	1919.5.17-18	第7回山陰オリンピック大会	松江市連合青年会	松江市末次埋立地
第8回	1920.5.29-30	第8回山陰オリンピック大会	松江市連合青年会	松江市末次埋立地
第9回	1921.5.28-29	第9回山陰オリンピック大会	松江市連合青年会	松江市末次埋立地
第10回	1922.5.27-28	第10回山陰オリンピック大会	松江市連合青年会	松江市末次埋立地
第11回	1923.6.2-3	第11回山陰オリンピック大会	松江市連合青年会	松江市末次埋立地 (改良工事あり)
第12回	1924.5.25-26	第12回山陰オリンピック大会	松江体育協会	松江市末次運動場
第13回	1925.5.30-31	第13回山陰オリンピック大会	松江体育協会	松江市末次運動場
第14回	1926.5.15-16	第14回山陰オリンピック大会	松江体育協会	松江市末次運動場
第15回	1928.6.9-10	第15回全山陰陸上競技選手権大会	松江体育協会	松江市末次運動場
第16回	1929.9.21-22	第16回全山陰陸上競技選手権大会	松江体育協会	昭和運動場 (市立の新競技場が竣工)

長の佳節に「第1回陸上大運動会」が開催された(島根陸上競技協会編, 1957, p.7; 山陰新聞, 1913a)。主催は松江市連合青年会であったが, 参加は市内の青年会, 近郊の郡青年会, 中等学校などの県立学校, 市内商店街にまで広く呼びかけた(島根陸上競技協会編, 1957, p.7)。会場は松江市内の天神裏(灘町)埋立地を利用したが, フィールドとトラックの区別もなく, 雑草を刈った凸凹の広場に石灰で区切った一周150mの楕円状の走路が設けられただけであった。素足で走る参加者も多かったようである(島根陸上競技協会編, 1957, p.8)。

競技種目は次のとおりであった。400m競争, 600m競争, 800m競争, 1000m競争, 2000m競争などの走競技に加え, 番外に履物提灯, 樽運び, 傳馬競争, 二人三脚, 袋競争, 借物競争などの遊戯的な競技が行われ, 余興としてバーゼル式飛行船飛揚, カーチ式飛行機飛揚, 達磨ダンス, 仮装行列なども披露された。大会の主要種目である青年会員の1000m競走と市郡連合の2000m競走の優勝者には, 松陽新聞社と山陰新聞社から優勝旗が授与された(島根陸上競技協会編, 1957, pp.8-11; 山陰新聞, 1913c)。

そして, 大運動会で最も人気となった競技が, 市内商店街店員によるクロスカントリーレースであった。クロスカントリーレースは, 市内横断競走であり, 市内12か所に設置された関所を巡って襷を受け取ってゴールする競技であり, 経路は選手の自由とされた(山陰新聞, 1913b)。

競技は凄まじい応援の応酬とともに行われ, 記録は考えずとにかく勝利優先であった(島根陸上競技協会編, 1957, p.10)。応援団のヤジが猛烈を極め, 2000m長距離競走では2名の学生選手同士の接触による妨害事件も起こる始末であった。この妨害事件により両者(校)応援団の小競り合いにも及び, 競技は一時中断し(天候悪化もあり), 3日後に和解を経て競技再開となった(島根陸上競技協会編, 1957, p.10; 山陰新聞, 1913)。

このように第1回の大運動会はお祭りのように喧騒を極め, 連日の新聞でも余興的に報道された。以後, 松江市連合青年会主催の運動会は毎年開催されるようになった。

「第2回陸上大運動会」(1914年11月7日開催)においても山陰新聞社および松陽新報社の優勝旗がそれぞれ寄贈された。地元の新聞社ではこの大運動会を盛り上げるため, 当日の新聞に青年たちの士気を鼓舞する以下のような記事を大きく掲載している。

「大運動會選手諸君!!

軍國の秋闊けて氣は愈々澄み渡り, 乾坤一氣, 宛ら洗れたるが如き爽快を感ず。わが市聯合青年會主催第二回青年陸上大運動會の本日を以て開かるゝ, 快更に快, 雲集の健兒, 赤裸々の力を奮つて千鳥城下を震撼する者は誰ぞ, 唯見る我社寄贈の優勝旗の翩翩として金風に翻るを。而して我社は本日の競技に際し, 新たに純銀賞牌三個を調製し, 之を左記番組の優勝者に授与して大に錦上に花を飾らむとす。フレイ精鋭なる選手諸君! 勝利は天祐の有無にあらず, 優勝旗と賞牌と, ひとしく諸君の壮烈なる努力に俟つ。

(運動順序書中)

第三回 クロスカントリーレース(市内各商店員)

第十回 八百米突徒歩競走(市内各青年會)

第十一回 八百米突徒歩競走(郡青年會各學校)」(山陰新聞, 1914)

このように, 新聞社が大会運営を支援するとともに, 青年たちの勝利欲を煽り, 多くの観客を動員し, 地域民衆のスポーツ熱を一層高めていったとみられる。

観客が最も期待した競技に長距離競走がある。この年2000m競走で優勝した杵築中学の得能末吉選手が脚光を浴びた。得能選手は, その翌年5月に開催された大阪毎日新聞社主催「日本オリンピック大会」(於: 大阪豊中グラウンド)へ松江

市連合青年会から派遣された。彼は日本オリンピック大会において5000mに出場し2位になった。このように、中央大会で活躍したとあって、得能選手の活躍ぶりが山陰新聞号外で讃えられた(山陰新聞, 1915)。その後も同年11月の陸軍戸山学校で開催された第3回全国陸上競技大会に出場し、5000mで見事優勝を果たし、得能と山陰の存在が全国に知られるようになった。(島根陸上競技協会編, 1957, p.19)

この松江の大運動会は、第3回大会(1915年4月25日開催)まで松江市連合青年会主催「陸上大運動会」として開催された。

2. 「山陰オリンピック大会」へと改称

(1) 「オリンピック」大会名の登場

第4回大会は、1916年5月8日に「第1回山陰オリンピック大会」として松江市連合青年会が開催した(大阪朝日新聞, 1916)。大会名は「古代ギリシャのオリムピア祭に倣って」改称したとある(島根陸上競技協会編, 1957, p.30)。得能選手の全国大会での活躍により、山陰スポーツ界は急に活気づき、スポーツ熱が高まった。中央で行われているような近代的な競技会を取り入れようということになり、競技会場を末次埋立地へ移し、名称を「山陰オリンピック大会」と改めたのである。(島根陸上競技協会編, 1957, p.30)

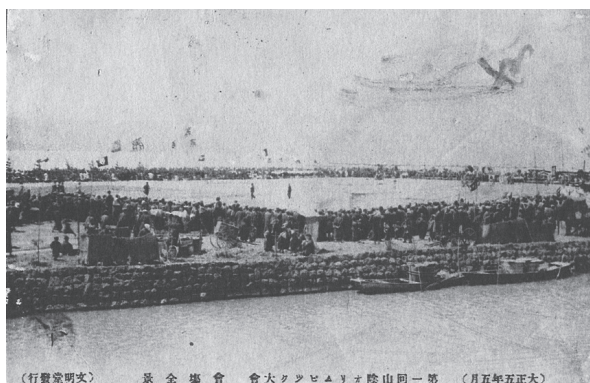


図1. 「第一回山陰オリムピック大会 会場全景」(1916年5月)(文明堂発行, 発行年不明)

当時の山陰新聞には「山陰オリンピック大会」開催に向けた意気込みが、以下のように報じられている。

「●山陰オリンピック大会

松江市聯合青年會にて山陰オリンピック大會の計劃ある事は曩きに報ずる所ありしが同會にては大正二年以来毎年一回陸上大運動會を開き毎回盛況を極め參加區域は島根縣下中等學校及各青年會に限らるゝの状態なりしが時勢に鑑みる所あり大に其區域を擴張し苟も本會の事業を賛するものは奮て參加せしめ専ら山陰男子の体育を奨励し將來山陰道を一團となし大に裏日本の士氣を鼓舞すると全時に山陰人士の覺醒を圖るの目的を以て第一回山陰オリムピック大會を松江に開き山陰健兒の奮起を促進し以て空前の大會を開設する計畫をなし…(後略)」(山陰新聞, 1916a)

「時勢に鑑みる所あり」と記されているのは、次第に大運動会の存在が各地に知られて、参加を希望する若者が増加してきたことを物語る。そこで、この大会からは参加地域を島根・鳥取両県の青年会や各学校生徒に広げ、官営銀行や会社、商店組合等所属の成人や地域の有志の参加種目も設けた(山陰新聞, 1916a; 大阪朝日新聞, 1916)。

競技会場も手狭になったため城山二の丸から宍道湖畔の末次埋立地へと移した(島根陸上競技協会編, 1957, p.30)。以後、第15回(1928年)まで末次埋立地が競技場として使用されることとなる。

競技種目は毎年呼物となっているクロスカンントリーレースと、有志の「サンドウチチ競走」(競技方法は不明)を除いては、近代的な陸上競技種目に限られ、今大会からは走幅跳や走高跳・高竿跳などのフィールド競技も設けられた(山陰新聞, 1916a)。また、尋常・高等小学校児童による競技も加わり、新聞社の優勝旗が大阪毎日新聞社、大阪朝日新聞社からも寄贈されるようになった(山陰新聞, 1916b)。「オリンピック大会」へと名称変更した年から大阪の新聞社が支援に加わったことは、競技種目がさらに充実し、規模が拡大していくことにつながる。

また今大会では、松江青年会が1912年の第5回オリンピック（ストックホルム）大会に参加した「日本のマラソン王」と呼ばれる金栗四三を招聘し、指導を仰いでいる。金栗は大会翌日も市内の学校で児童・生徒を対象とした指導を行い、「オリンピック帰りの新知識を披瀝して多くの感銘を与えた」ようである（島根陸上競技協会編, 1957, p.34）。世界のオリンピック大会が、日本の山陰地域の青少年たちに身近になった瞬間であったことだろう。

第5回大会は、1917年5月19-20日の2日間にわたって「第2回山陰オリンピック大会」として開催された。この大会には兵庫県や京都府からも選手の参加があった（島根陸上競技協会編, 1957, p.35；大阪朝日新聞, 1917b）。今大会は、中央の大会に倣って競技種目はすべて「ヤード制」^{注3)}に改められ、従来の受賞方法も商店街から寄贈された賞品副賞品を一切廃止し、優勝旗と銀賞牌・銅賞牌のみとされ、賞状には正確なレコード（記録）が記載されるようになった。この見直しは「不純の行為を避け」、「真に運動を奨励する意見」が重視されていたことが背景にある（大阪朝日新聞, 1917a）。このように、次第に記録を求める公正な陸上競技会としての体裁を整えていった。そして、この山陰オリンピックにおいて勝利した選手には、「極東選手権大会」や「万国オリンピック大会」への道が開けるようになった。つまり、山陰地域の陸上競技熱の高まりとともに、山陰オリンピック大会を全国大会や世界大会への登竜門として位置付ける選手が現れるようになり、この大会が山陰の優秀な選手発掘の場となっていったことがわかる。また、優秀選手として青年会選手よりも学生選手の活躍が目立つようになる（島根陸上競技協会編, 1957, p.36）。学生選手台頭の始まりであった。

(2) 大会の黄金期

「第6回山陰オリンピック大会」^{注4)}（1918年5月18-19日開催）以降、大会の黄金期ともいえる

参加者数増大の時期を迎える。第6回大会にも山陰両県のほか、京都府や兵庫県からも参加がみられるようになり、山陰地域においては鳥取県からの学生選手が増加するようになる（大阪朝日新聞, 1918）。競技種目には、従来の陸上個人競技に加え、大阪開催の「東西対抗競技会」（大阪朝日新聞社主催）に倣って、山陰を東西に分けた優秀選手のみによる「東西対抗競技」（種目：100m, 200m, 400m, 800m, 1哩, 5000m）が設けられた（島根陸上競技協会編, 1957, p.40）。また、これまで余興的呼び物であった商店街店員のクロスカンントリーレースは、種目から姿を消した^{注5)}。

翌年の「第7回山陰オリンピック大会」（1919年5月17-18日開催）は、鳥取県からの参加者が夥しく、全参加選手約800名のうち半数が鳥取および兵庫県からの参加者で占められるようになった（大阪朝日新聞, 1919）。競技種目の中では、特にマラソンが注目され、10哩と25哩マラソンのうち25哩マラソン優勝者には大阪毎日新聞社の特製優勝旗が授与されることとなり、選手たちに一層の刺激を与えた（大阪朝日新聞, 1919）。こうして今大会では新記録が続々と出され、優秀選手が現れ、山陰大会の真価がさらに高まっていった（島根陸上競技協会編, 1957, p.44）。

以後、第8回（1920年5月29-30日）・第9回（1921年5月28-29日）・第10回（1922年5月27-28日）と毎年開催されたが、年々参加選手が増加し、第10回大会には山陰全道からの参加申し込みが1660名に達したとの報道もある（大阪朝日新聞, 1922b）。

増加の一端をたどる参加者と無責任な参加申込者を制限するために、第11回大会（1923年6月2-3日）からは「参加料」を徴収し、番外選手についても幹部会において承認した選手のみ出場を認めることとしたが、結果として参加者は総勢約900名に及んだ（大阪朝日新聞, 1923a）。

また、学生選手の活躍が目立つようになり、学校対抗の性格が強くなった。総合得点の計算によ

り学校対抗の優勝校には優勝旗が授与された（大阪朝日新聞, 1923b）。また9回大会からは鳥取師範学校が精鋭を引き連れて出場するようになり、同師範の優秀な選手が鳥根の選手たちの勝利を脅かし、以後、鳥根・鳥取両県の覇権をめぐる対抗意識へと発展していく（鳥根陸上競技協会編, 1957, p.46,47）。

(3) 学生選手の活躍

学校に優勝旗を持ち帰ることが如何に荣誉なことであったか。また優勝するために選手の真剣勝負はもちろんのこと応援団も熱いエールを送った。

学校が対抗戦の勝敗に一喜一憂する一方で、「山陰オリンピック大会」では優秀な選手が発掘され、国際オリンピック大会にも参加した。その筆頭に、第7回オリンピック・アントワープ大会（1920年）の陸上競技5000mに出場した佐野幸之助（松江青年会出身）がいる。佐野は山陰では学生選手として出場したのではなかったが、その後、山陰の陸上界からは「山陰オリンピック大会」（のちに「山陰陸上競技選手権大会」）を登竜門として国際舞台で活躍した選手が複数現れた。第8回パリ大会（1924年）の五種競技に出場した上田精一（鳥根師範学校出身）、第10回ロスアンゼルス大会（1932年）に陸上競技100mで出場し6位入賞を果たした吉岡隆徳（鳥根師範学校出身）などがある。吉岡は「暁の超特急」とも呼ばれた（NHK松江放送局, 1968）。このように「山陰オリンピック」およびそれを継承していった山陰の陸上競技大会は、県代表として全国や国際大会へ出場する選手選抜の場でもあった。県出身選手の活躍に県民は期待を寄せるとともに、彼らの活躍によってさらに山陰における陸上競技熱が高まっていったのである。

(4) 松江体育協会の成立

1923（大正12）年の第11回山陰オリンピック大会が終わってから、青年会幹部と青年との対立抗

争が表面化した。山陰オリンピック大会の規模が大きくなりすぎて、青年会には持て余し気味になったのと、大会経費の膨張にともなって会計業務の乱脈、一部の幹部の独占横暴などが問題視され、青年会の封建的思想や運営の杜撰さに対する批判から改革を唱える青年らの勢力が現れるようになったことが要因のようである（鳥根陸上競技協会編, 1957, p56）。

こうして翌年（1924年）、第12回山陰オリンピック大会の開催を目前に控えた5月1日に、松江市連合青年会の体育部を解体し、青年らにより新たなスポーツ団体として「松江体育協会」が結成された（鳥根陸上競技協会編, 1957, p56）。そして、同年5月25-26日「第12回山陰オリンピック大会」が、新たに発足した松江体育協会の主催により開催される運びとなった。この大会には、兵庫・鳥取・鳥根・山口県より約1000名の選手が参加し、東京からも早稲田大学の選手が参加したと伝えられている（大阪朝日新聞, 1924；鳥根陸上競技協会編, 1957, p.105）。

また同大会からは、フィールドの中央で米子中と松江中の模範バスケットボール競技が披露された（鳥根陸上競技協会編, 1957, p.104）。（翌年の第13回山陰オリンピック大会には正式にバスケットボール競技が加わり、8チームの参加となる（大阪朝日新聞, 1925b）。）さらに、松江高等女学校の生徒約600名による華麗な団体体操も披露され、観衆は約3万人とも報じられた（大阪朝日新聞, 1924）。

(5) 競技規則の制定と大会運営の合理化

第13回大会（1925年5月30-31日）には正式に各種目の採点基準を決定し、短距離走から長距離走およびマラソンにおいて1等から3等（マラソンは5等）までの配点を示した（大阪朝日新聞, 1925a）。

さらに、第14回大会（1926年5月15-16日）では「競技者規定」「応援団規定」を設け、選手および応援団は事前に登録（申し込み）することを

規定し、登録された選手は当日2回の点呼を経て競技に参加することとなった。また、選手は競技前の集合と、競技後の解散を速やかに行い、競技進行を円滑に行える取り組みがなされた。さらに、毎年ヤジや怒号で荒れる応援の応酬や競技者への妨害を是正するため、応援団旗や鳴り物を規制し、競技場内への応援団の立ち入りを禁止するなど、応援・観衆と競技選手との明確な境界を設けた（大阪朝日新聞, 1926）。

これらの競技会運営に関する規定の制度化は、1925年3月に発足した「全日本陸上競技連盟」（以下、全日本陸連と略す）によって全国的組織化と国内の競技の統括が図られた時期（山本, p.34）と近接していることから、全国的なルールの統制が山陰にも影響を与えたと考えられる。同年に「松江体育協会」が全日本陸連に山陰代表として加盟することとなり（鳥根県体育協会, 1989）、全日本陸連が発足直後から制定に取りかかっていた「陸上競技規則」も翌年に成文化され、この年5月開催の第13回全日本陸上競技選手権大会（於：大阪）から適用された（山本, p.627）。こうして、「山陰オリンピック大会」は全国的な競技規則に従って運営方針を決定していかなければならなくなっていったものと思われる。

このように、喧騒を極めた従来の大衆運動会から、中央の競技連盟が示す競技規則等に準じた合理的な記録会へと、山陰のスポーツイベントである「オリンピック大会」は次第に様相を変えていったといえる。

(6)「山陰オリンピック大会」の名称変更 — 「オリンピック」大会名の消滅—

1926年末に大正天皇が崩御し、1927年は諒闇のため大会は開催されなかった。

翌1928年6月9-10日開催の第15回大会からは「全山陰陸上競技選手権大会」に名称変更がなされた。『鳥根陸上競技史』（1957, p.122）によれば「従来オリムピック大会と市民にも選手にも親しまれた名称も昭和の御代と変ると共に廃止さ

れ、全山陰陸上選手権大会と近代的な名称と変えられ、一寸市民を淋しがらせた」とある。

この時期に「オリンピック」という名称が大会名から消滅した背景には、以下のような世界の動向が関連していると考えられる。来田（2001）、和田（2013）によると、IOCでは1910年から1937年までの間に、世界の国や地域で「オリンピック」や「オリンピアド」という名称が濫用されていることに懸念を示し、IOCが開催するオリンピック大会以外には「オリンピック」という名称を競技会名に使用しないよう要請した経緯がある。1913年に第1回「東洋オリンピック」が開催されていたが、1915年の第2回大会からは「極東選手権大会（極東大会）」として「オリンピック」という名称を使用しなくなった（来田, 2001）。1925年にはIOCの会議において国際的な「学生オリンピック大会」と「女子オリンピック大会」の事例も取り上げられ、語の濫用を警告する通知も出された（来田, 2001）。クーベルタン（Pierre de Coubertin, 1863-1937）も「1919年に発行された *Almanach olympique pour 1920*（『オリンピック年鑑1920年版』）で、不規則かつ任意の間隔で開催されている限定された地域の競技会に『オリンピック』という名称を使うべきではないと主張した」という（和田, 2013）。

このようなIOCの協議や通告を受けて、1925年、大日本体育協会は「オリムピック」競技会という名称についての報告を機関誌「アスレチック」に掲載し、IOCが加盟諸団体に対し「オリムピック」という名称の濫用防止を要請していることを伝えた（来田, 2001）。こうして、日本国内で「オリンピック」を使用していた各種競技会が改称の対象になったと考えられる。当時、全国大会をはじめ国内の一部地域に限定された競技会名に「オリンピック」を使用している事例は少なくなかったが、1925年以降名称が改められていった。「山陰オリンピック大会」もその一つであったといえる。

大会名が改められた山陰の第15回大会では

「ホ・ス・ジャンプ」の種目名も「三段跳」に変更された（島根陸上競技協会編, 1957, p.122). そのほか, 昭和に入って以降は「山陰陸上競技選手権大会」として, 競技規則の遵守や記録の正確さがさらに求められるようになり, 新たに記録審査委員なる役員も配置されるようになった（島根陸上競技協会編, 1957, p.122). このように「オリンピック」という名称の消滅とともに, 従来の騒々しさは影をひそめ, 規則に忠実な記録会へと統制されていった。「昔を知る者に取つては聊か物足らなさを感じた」（島根陸上競技協会編, 1957, p.124）ようであり, 前近代的なお祭り騒ぎを求めた観衆にとっては, この大会の変容が幾分淋しさを感じさせ, 時代の移り変わりを感じ取った瞬間であったのかもしれない。

また, 今大会からは再び参加者が島根・鳥取両県に限られた。参加選手も約700名に達してはいたが, 大正時代よりはかなり減少し, 大会規模が縮小されたことは否めなかった。これには前年の諒闇による大会中止が影響しているようであった。前年は山陰大会が中止されたことにより, 大会参加を目指して練習に励んでいた青年・学生選手たちが, 他の地域の競技会に参加するようになり, それまで山陰に集中していた参加選手が, 各地方大会へと分散したことが一つの要因のようであった（島根陸上競技協会編, 1957, pp.121-123).

また鳥取師範などの学生が不参加, 翌1929年の第16回大会にはさらに鳥取一中も不参加を決め, 次第に参加数の減少と, 以前のような両県選手の激しい競争が見られなくなったことは, 大会を幾分盛り上がりに欠けるものとした（島根陸上競技協会編, 1957, 127). 学生参加の減少は, 1926年に発せられた, 学生の競技会参加を制限する文部省からの通達の影響があるものと思われる。一方で, 青年選手たちは1924年から開催されるようになった「明治神宮体育大会」への出場とそこで好成績を修めることを最大の目標とするようになり, 青年たちの目はさらに中央へと向かう。

このように, 大正期に全盛を極めた「山陰オリンピック大会」は, 昭和に入ってその名称変更とともに, 山陰両県の陸上競技記録会および地方予選会としての位置に落ち着くこととなる。

まとめ

以上, 山陰地域で盛大に開催され, 選手や観客を魅了した大正期の「山陰オリンピック大会」の詳細について述べた。この大会は松江市連合青年会という青年団組織によって企画・運営されたのが始まりである。民衆や学生を巻き込んだ娯楽的スポーツイベントとしての性格が強く, 日露戦争後のさらなる国威発揚が目指される中でも, 山陰では軍隊や教育者が直接大会運営に関わったという事実は見られなかった。これは, 先に述べた石川県青年体育大会とは趣を異にする。このような「山陰オリンピック大会」によって, 青年を中心とした民衆のスポーツ熱が高まり, 大会規模は年々拡大していったのであるが, このように地域のスポーツ活動が活性化していく原動力は何であったのか, また「山陰オリンピック大会」という競技会開催の意義は何であったのかについて考察を加える。

「山陰オリンピック大会」では優勝者や優勝校に山陰新聞社, 松陽新報社, 大阪朝日新聞社, 大阪毎日新聞社から寄贈された優勝旗が授与された。これらの新聞社は大会スポンサーという立場であるとともに, 大会開催前後の様子や大会当日の各競技記録・優秀選手およびその写真などを新聞に大きく掲載し, 民衆に参加を呼びかけ, 大会の盛況ぶりを報道した。新聞による連日の大会報道, 活躍選手賞賛の記事は「オリンピック」を民衆に知らしめ, スポーツ熱を煽ったといえる。また, 大阪において「大阪朝日新聞社」は「東西対抗競技会」を, 「大阪毎日新聞社」は「日本オリンピック大会」を開催し, 山陰と関西を結んだ。このような新聞社の影響力は当時, 陸上競技に限らず, 学生野球や庭球の大会などにおいても同様にみられた。

青年会の「陸上大運動会」から始まった競技会は、「山陰オリンピック大会」と名称を変え、優勝した選手には全国規模の陸上競技会、極東選手権大会、国際オリンピック大会への道が開かれていった。そして、県出身選手の世界での活躍や、地域にオリンピックを招待し指導を仰ぐことにより、世界の「オリンピック」が山陰地域の人たちにも身近になっていったといえる。このように、国内や世界で活躍できる選手の発掘によって、「する」「みる」「支える」スポーツとして地域の人たちにスポーツが浸透していったのではないかと考えられる。この山陰の事例のように、地域のスポーツイベントに使用された「オリンピック」という名称は、IOCによって濫用であると認識され、日本では昭和に入って消滅してしまうが、この名称が市民参加型の「お祭り」ムードを生み出し、地域の人たちをスポーツに取り込む一つの機能を果たしたといえることができるだろう。

注

注1) 大正期の新聞記事には「山陰オリンピック大会」「山陰オリムピック大会」の両方の記載が見られる。本研究では史料からの引用のほかは、常用漢字を用い、また「オリンピック」として表記を統一した。

注2) 1924(大正13)年には第1回「日本女子オリンピック大会」が大阪市立運動場ほかで開催されている。大会には人見絹枝も出場したことで知られている。(山本, 1979)

注3) 1916(大正5)年9月に芝浦の競技場で開催された第4回陸上競技大会は、第3回極東選手権大会の予選を兼ねて行われたため、今大会に限り従来のメートル制に代わってヤード制が採用された。第2回山陰オリンピック大会もそれに倣ったと考えられる。(財団法人日本体育協会, 1986; 山本, 1979,)

注4) 第6回大会からは、第1回の「陸上大運動会」以来の通算開催回数に合わせて大会の回数が統一された。

注5) 本研究で史料に用いた新聞記事および島根陸上競技史では、第6回大会以降の競技種目と成績の記事から「クロスカントリー」種目が見られなくなった。

文献

- ・国立教育研究所編(1974)日本近代教育百年史 第七巻 社会教育1。(財)教育研究振興会: 東京, pp.847-848
- ・高津勝(1994)日本近代スポーツ史の底流. 創文企画: 東京, pp.32-34
- ・熊谷辰治郎(1942)大日本青年團史. 熊谷辰治郎: 東京, pp.90-96 ((1989)復刻版日本青年団史, (財)日本青年館: 東京による)
- ・NHK松江放送局編(1968)島根の百年. 報光社: 松江, p.54
- ・大久保英哲(1998)石川の体育・スポーツのあゆみ: 石川県体育協会設立(昭和23年)以前(『(財)石川県体育協会創立50周年記念史「大地揺るがす感動」スポーツ石川のあゆみ』). 石川県体育協会: 金沢, p.121
- ・「大阪朝日新聞」(1916)山陰版 山陰オリンピック大会=未曾有の盛況=. (5月9日付3面). 大阪朝日新聞社
- ・「大阪朝日新聞」(1917a)山陰版 山陰大会新方針. (5月4日付3面). 大阪朝日新聞社
- ・「大阪朝日新聞」(1917b)山陰版 空前の大会=愈明日に迫る=. (5月18日付3面). 大阪朝日新聞社
- ・「大阪朝日新聞」(1918)山陰版 山陰オリムピック大会 愈十八十九両日舉行. (5月16日付3面). 大阪朝日新聞社
- ・「大阪朝日新聞」(1919)山陰版 切つて落さるゝ競技の序幕. (5月17日付3面). 大阪朝日新聞社
- ・「大阪朝日新聞」(1922a)山陰版 中國オリムピックの盛況. (5月13日付3面). 大阪朝日新聞社
- ・「大阪朝日新聞」(1922b)山陰版 山陰オリム

- ピックの前景氣. (5月24日付3面). 大阪朝日新聞社
- ・「大阪朝日新聞」(1923a) 山陰版 明日から開催の山陰オリムピック大会. (6月1日付3面). 大阪朝日新聞社
 - ・「大阪朝日新聞」(1923b) 山陰版 運動界 競技得点 山陰オリムピック. (6月5日付3面). 大阪朝日新聞社
 - ・「大阪朝日新聞」(1924) 山陰版 第二日の山陰オリムピック. (5月27日付3面). 大阪朝日新聞社
 - ・「大阪朝日新聞」(1925a) 山陰版 本日から開く山陰オリムピック. (5月30日付9面). 大阪朝日新聞社
 - ・「大阪朝日新聞」(1925b) 山陰版 山陰オリムピックの戦績. (6月2日付9面). 大阪朝日新聞社
 - ・「大阪朝日新聞」(1926) 山陰版 競技者規定, 應援團規定. (5月15日付9面). 大阪朝日新聞社
 - ・來田享子(2001) IOCにおける「オリンピック」の名称使用に関する主張－1925年 IOC 会長バイエ・ラトゥール発 IF 会長宛文書および1937年“World Bridge Olympic”に関する文書を中心に－. 体育史専門分科会秋の定例研究集会発表抄録
 - ・佐々木浩雄(2000) 大正期における地方青年団競技会の出現－大正7～10年石川県青年体育大会の事例から－. 体育史研究 第17号, pp.1-13
 - ・「山陰新聞」(1913a) 聯合青年會運動會. (10月12日付1面). 山陰新聞社
 - ・「山陰新聞」(1913b) 賑ひたる佳節の運動會. (11月2日付3面). 山陰新聞社
 - ・「山陰新聞」(1913c) 雲霞の如き見物中に開かれたる陸上大運動會. (11月4日付3面). 山陰新聞社
 - ・「山陰新聞」(1914) 社告 大運動會選手諸君!! (11月7日付3面). 山陰新聞社
 - ・「山陰新聞」(1915) 得能選手は勝てり(號外再録). (5月3日付3面). 山陰新聞社
 - ・「山陰新聞」(1916a) 山陰オリンピック大会. (4月8日付2面). 山陰新聞社
 - ・「山陰新聞」(1916b) 山陰大會彙報. (5月3日付3面). 山陰新聞社
 - ・島根県体育協会編(1989) 島根県体育史. 島根県体育協会: 松江, p.43
 - ・島根陸上競技協会編(1957) 島根陸上競技史. 島根陸上競技協会: 松江
 - ・和田浩一(2013) 嘉納治五郎のピエール・ド・クーベルタン宛書簡(2)－第一次世界大戦後からクーベルタンのIOC会長辞任まで－. 講道館柔道科学研究会紀要 第14輯, pp.11-29
 - ・山本邦夫編・日本陸上競技連盟監修(1979) 日本陸上競技史. 道和書院: 東京, p.610
 - ・財団法人日本体育協会(1986) 日本体育協会七十五年史. 財団法人日本体育協会: 東京, p.58

付記

本研究は、九州国立大学間博士後期課程連携大学院プログラム「平成26年度 体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム開発 教材開発プロジェクト費」による共同研究の成果の一部である(プロジェクト事業名:「体育・スポーツの人文科学系領域における教材開発—大正期におけるオリンピック・ムーブメントの展開をテーマとして—」, プロジェクト代表者: 山田理恵, 共同研究者: 藤坂由美子・国重徹)。

謝辞

本研究にあたり、島根大学名誉教授・久保田康毅氏には、島根県の陸上競技史に関する史料についてご助言をいただきました。また、松江工業高等専門学校・井上明校長、森田正利教授にもご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

さらに、付記で示した教材開発プロジェクト費による学内共同研究の機会をつくっていただきました松下雅雄氏(当時鹿屋体育大学理事・副学長, 現・鹿屋体育大学学長)に心より謝意を表します。